

## 自分の「ものさし」、相手の「ものさし」

赤沼 祐子

初任校は、糸魚川市の中学校。校舎の四階からは海が見え、グラウンドに吹く風は潮の香りがした。長野県の外で暮らすのは初めてだった。天気によって海の色が変わることを初めて知った。冬は雪を溶かすために道路脇から水が出ている。水が凍ることはない。社会人としても、住民としても初めてだらけのスタートだった。私は憧れの国語教師になれたことがとても嬉しく、張り切っていた。授業力を磨くために夢中で自分の理想を追いかけた。その結果、気付かぬうちに生徒に多くの無理を強いていた。しばらくすると生徒との関係がこじれてしまった。教師をしていると苦しいことが山ほどあるが、私にとって生徒との関係が悪くなるのが一番辛かった。この時、授業の前提には信頼関係があることを痛感した。苦しい日々を先輩方に支えられてなんとか堪え忍んだ。励まされた多くの言葉の中に、ずっと心に留めている言葉があ

る。

「自分のものさしを相手に押しつけてはいけない。」  
人は、物事を測る「ものさし」をそれぞれ持っている。その物差しは人それぞれ長さも違えば、目盛りも違う。私の「ものさし」で測った生徒に望む姿は、ある生徒にとっては厳しく実現が難しい姿かもしれない。自分の「ものさし」を押しつけるのではなく、生徒が納得するように相手の「ものさし」に合わせて無理なく成長を促すことが大切である。期待の表し方を間違え、生徒を苦しめていた自分に気がついた。

もう一つ、心に留めている言葉がある。

「我以外全て我が師。人は人に教えられ成長するもの。そこには生徒と教師の壁はない。」

仕事に夢中になるあまり、生徒へ何かを教えることばかり考えていた。どんな人にも自分の学びになる姿がある。生徒から学ぶ謙虚な姿勢もまた、私には必要だった。授業力はもちろん必須だ。しかし、信頼関係のない生徒との授業では、深い学びにたどり着くことが困難になる。授業力を磨くことはもちろん、生徒指導において対人スキルを磨くことも意識しながら、教職六年目を過ごしている。

(あかぬま ゆうこ 新潟県柏崎市立東中学校)